

ポンティング：竹田・別府・鉄輪の記 (訳：由佐悠紀)

In Lotus-Land Japan by Herbert G. Ponting (1911); Macmillan and Co., Limited

CHAPTER VII The Great Volcanoes, Aso-San and Asama-Yama. (pp. 105-106)

(原本：神奈川大学図書館蔵)

[・・・阿蘇・中岳の火口を見て (火口を覗きこむ人達の写真がある)]・・・、腰を上げて宮地へ下る道を歩き出した。(訳本 p.140) このあとに、以下の文章が続く。

九州を横断した旅は、始めから終わりまで、大変興味深いものであった。竹田の町は高い山々に囲まれた谷あいであり、まるで絵のようである。山々には四十を超えるトンネルが穿っており、そのいくつかを通らないと、町に入ることができない。近くには、堅くしまった玄武岩 (訳注：阿蘇溶結凝灰岩) の崖の上から落ちてくる、きれいな滝がいくつもあり、この小さな町を取り巻く景観はことのほか美しい。

しかし、旅の終わりに訪ねた別府と鉄輪は、どこよりも最も興味深いところであった。この二つの集落は、瀬戸内海の南西の入口に当る豊後水道の沿岸に位置している。

近隣はすべて火山地域なので、いたるところに温泉がある。別府の町には公衆の温泉場がたくさんあり、各家庭にも温泉がある。また、海岸はほとんど沸騰状態の湯で泡だっている。何百人もの住民が一男も女も子供たちも一海岸に集まり、砂に穴を掘って、その中に横たわり、頭だけを出して砂をかける。こうして人びとは何時間も体を蒸し、眠りさえる。私も試してみたが、私が掘った穴にしみだしてくる湯は大変熱くて、その中に立つことは、ましてや横たわるなんて、とても出来やしなかった。

別府から数マイル離れた鉄輪の村では、土地が火山の熱で満たされているため、鉄棒で地面に孔を開けると、どこでも蒸気が噴き出すのである。ほとんどの家の戸外には、そんな蒸気孔があって、料理に使われている。使用しないときは、硫気が家の中に入って来ないように、栓をしなければならない。

日本で最も特異な湯治場を、ここで見るができる。人々は、公衆の温泉に入った後、一度に十人余りが恐ろしく熱気のコもった岩室にもぐり込む。半時間以内に這い出してきた、屋根から落ちてきた泥を体に塗り、別の所で地下から汲み上げて引いて来た冷水の滝に打たれる。このトルコ風の風呂は、リウマチの治療にたいへん良く効くと言われている。

鉄輪には他にも沢山の温泉があり、そのいくつかは深さ約 15 インチ (訳注：約 40 センチ)、幅は人が寝そべることができるほどの、細長い浴槽になっている。入浴する者は、この中に並んで横たわる。男子用と女子用があるが、老若男女が一緒に入り、世間話をするのはごく普通のことだ。

鉄輪には、快いものばかりがあるのではない。そのひとつは深緑色で硫黄気の泥が煮え立つ沼であり、もうひとつは鮮やかな緑色の沸騰する硫黄の湯である。自殺志願者のお気に入り場所だと聞いた。私は、これらの恐ろしい沼をのぞき込んだとき、そこに飛び込むには、超人的な勇気あるいは狂気が必要だろうと確信した。

このあとに、浅間山登山の文章が続く。(訳本 p.140)